

I Rの普及拡大と資本コスト

谷口 雅志（日本I R協議会）

企業にとって、株価の動向が従来以上に重要となってきた。

戦後、企業金融の大半を担ってきた銀行も、90年代後半から2000年代初頭にかけての金融危機、資本増強の経緯を通じて、より資本コストを意識した経営を目指している。また、企業も銀行の融資縮小から資本市場の重要性を再認識してきた。特に、海外投資家とのI R活動を行ってきた企業は、株価（資本コスト）を意識するようになっている。そのような企業は、リストラを検討・断行し、その後業績回復を達成している。

情報開示と資本コストの関係について、米国において先行研究が数多く行われているが、日本においても実証分析・研究が進んできた。今後もさらなる分析・研究が必要であるが、現時点での実証分析結果は、公的情報の精度が高い企業ほど資本コストが小さくなる、あるいは正確な経営者予想利益を公表することが資本コストの低減につながることを示唆している、と言った内容である。それでは、なぜこのような関係が生まれるのであろうか。

日本I R協議会では、毎年「I R活動の実態調査」を実施し、また、I R優良企業の選定も行っている。I R優良企業の特徴および「I R活動の実態調査」を分析することによって、上記課題について議論したい。